福崎町埋蔵文化財調査概要報告１

―県営圃場整備に係わる田原東部地区発掘調査―

大門遺跡・大門岡ノ下遺跡

1993年3月

兵庫県神崎郡福崎町教育委員会

あ　い　さ　つ

近年、埋蔵文化財発掘調査による新発見がマスコミにより広く報道されて多数の人々の関心を集めております。古代歴史を実証する貴重な埋蔵文化財の価値が見直される時、ここ播磨に位置する福崎町でも、圃場整備事業が進行するに伴い、埋蔵文化財発掘調査を実施しております。やがて、福崎町の未知の歴史が明るくされようとしています。

今回は、大門集落周辺の調査を実施いたしました。大門集落周辺は、神積寺の国指定文化財（12世紀末頃）をはじめ数多くの県・町指定文化財の存在する場所です。この度の発掘調査では、福崎町内で初めて確認されたものも出土いたしました。

この成果を誌上発表してご高覧いただくことによって、文化財の意義も一層深まることと思います。

最後に、この調査につきまして、ご協力、ご指導をいただいた関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成５年３月

福崎町教育委員会
福崎町教育長　後　藤　十　郎

例　　言

１．本書は、県営圃場整備事業（田原東部地区）に伴う、兵庫県神崎郡福崎町東田原字池田・皿池の下に所在する大門遺跡（大門池田地区）・大門岡ノ下遺跡の調査概要報告書である。
２．調査は、姫路土地改良事務所の依頼を受け福崎町教育委員会が主体となり実施した。
３．経費は、姫路土地改良事務所が負担し、一部国庫補助金を得て実施した。
４．現地調査期間は、以下の通りである。整理作業は、継続して行った。
　大門遺跡　皿池の下地区　平成４年５月13日～平成４年６月29日
　　池田地区　平成４年７月１日～平成４年８月17日
　大門岡ノ下遺跡　平成４年11月11日～平成５年１月６日
５．航空写真は、兵庫スカイフォトサービスに委託した。
６．現地調査・整理作業は、出田直（福崎町教育委員会）が担当した。
７．本書の執筆・編集は、出田が行った。
８．遺構・遺物の実測、写真撮影、製図は、出田が行った。
９．調査の実施にあたって協力をいただいた、多くの方々・機関は、後述する。

本　文　目　次

あいさつ

例　　言

Ⅰ．福崎町の概要……1
　Ⅰ－1．大門集落周辺の地理的環境……1
　Ⅰ－2．大門集落周辺の歴史的環境……1

Ⅱ．大門遺跡（池田地区）の調査……3
　Ⅱ－1．調査に至る経過……3
　Ⅱ－2．調査概要……3
　Ⅱ－3．遺　　構……4
　Ⅱ－4．遺　　物……6

Ⅲ．大門岡ノ下遺跡の調査……7
　Ⅲ－1．調査に至る経過……7
　Ⅲ－2．調査概要……7
　Ⅲ－3．遺　　構……9
　Ⅲ－4．遺　　物……10

Ⅳ．大門岡ノ下遺跡土層サンプル分析結果……17
　Ⅳ－1．経　　緯……17
　Ⅳ－2．試　　料（サンプル）の処理……17
　Ⅳ－3．結　　果……17

Ⅴ．ま と め……19

挿　図　目　次

図 1　福崎町位置図……1
図 2　大門集落周辺遺跡分布図……2
図 3　大門遺跡調査区位置図……3
図 4　調査区No. 9 遺構配置図……5
図 5　SX－2 遺物出土状況……4
図 6　SX－2 出土遺物……4
図 7　古　銭……6
図 8　大門岡ノ下遺跡調査区位置図…7
図 9　調査区遺構配置図……8
図10　住居址遺構図（SB－25）……9
図11　住居址遺構図（SB－25）……11
図12　SB－25出土土器……13
図13　石　棒……14
図14　敲　台……15
図15　石皿・磨り石……16
図16　土層サンプル採集地点……18

表　目　次

遺物観察表……21
大門遺跡（池田地区）……22
大門岡ノ下遺跡（土器）……22
大門岡ノ下遺跡（石）……23

図　版　目　次

図版１　大門遺跡（池田地区）
　上　大門遺跡遠景
　下　大門遺跡全景
図版２　上　調査区№9遺構状況
　下　調査区№9 SX－2
図版３　上　SX－2検出状況
　下　SX－2遺物出土状況
図版４　上　古銭出土状況
　下　SX－2出土遺物
図版５　大門岡ノ下遺跡
　上　大門岡ノ下遺跡遠景
　下　大門岡ノ下遺跡遺構状況
図版６　上　住居址検出状況
　下　住居址内遺物出土状況
図版７　上　石棒出土状況
　下　住居址状況
図版８　住居址内遺物（土器）
図版９　住居址内遺物（石器）

Ⅰ．福崎町の概要

１．大門集落周辺の地理的環境

大門集落は、福崎町内を二分割するかのように流れる市川の東岸約1.5km程東に入った県道三木・山崎線と播但道が交わるところ周辺である。ここは、河岸段丘高位（大門面）に位置する場所である。(1)

集落の北には、標高138.5mの妙徳山やそれに続く尾根、岩尾神社裏の標高139.5mの獅子山（通称岩尾社の山）と呼ばれる山がある。その間に谷底平野になっている谷があり、この中を、雲津川が流れる。過去、この川は、尻無し川と呼ばれ水の抜け道がなく、暴れ川となっていたようである。現在は、河川改修等を行い、市川に流れるようになっている。この集落東方には大谷池、大門皿池、南方には桜池があり田に水を供給している。

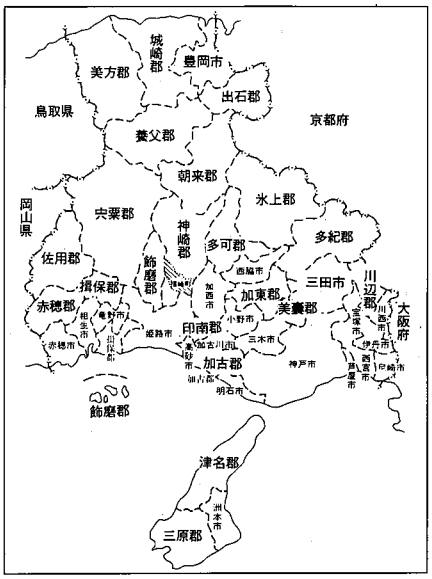


図１　福崎町位置図

２．大門集落周辺の歴史的環境

大門集落に人が住み始めた形跡は、平成２年度の分布調査の際に桜池の東方の田より旧石器時代の遺物が採集されたことにより、この頃より始まった可能性がある。(2)

次に見えるのは、縄文時代晩期で大門岡ノ下遺跡から住居址が確認された。ここからは、縄文土器の他に石棒・石皿といった遺物も出土した。この遺跡からは、弥生時代中期前葉頃の遺物も出土し、さらに中期後葉頃の遺物も出土している。他に中国道建設に伴う調査の際桜下池西遺跡からは、弥生時代中期後半の遺物が確認されている。(3)

古墳時代後期になると、妙徳山の麓に市川流域でも最大級の横穴式石室をもつ妙徳山古墳が造られ、(4)獅子山にビワクビ古墳群も造られてくる。(5)以前は、現在県道三木・山崎線沿いの「キせき販売店」そばに池ノ下古墳という市川流域でも最大級の横穴式石室をもつ古墳が存在したが、現在は、消滅してしまっている。(6)

妙徳山古墳のある横には、天台宗叡山派に属する、神積寺という寺がある。この寺は、一条天皇の正暦２年（991）慶芳上人によって開基されたと伝えられている。(7)この寺は、後に火災にあい、再興し、播磨天台六山に数えられるまでになった。この寺の南方に岩尾神社があるが、神積寺を開基する際、この神社に文殊像をあわせまつって鎮守としたようである。この寺社関係の文化財としては、寺の本尊、木造薬師如来坐像（国）、後堀河天皇の皇后の安喜門院の名が出てくる阿弥陀種子板碑（県）、(8) 開祖慶芳上人の墓であり西方の妙の池の西にある石造五重塔（県）、(9) 岩尾神社の三間社神明造りの本殿（県）、石橋（県）、慶長16年（1611）の銘のある石造鳥居（県）などがある。(10)

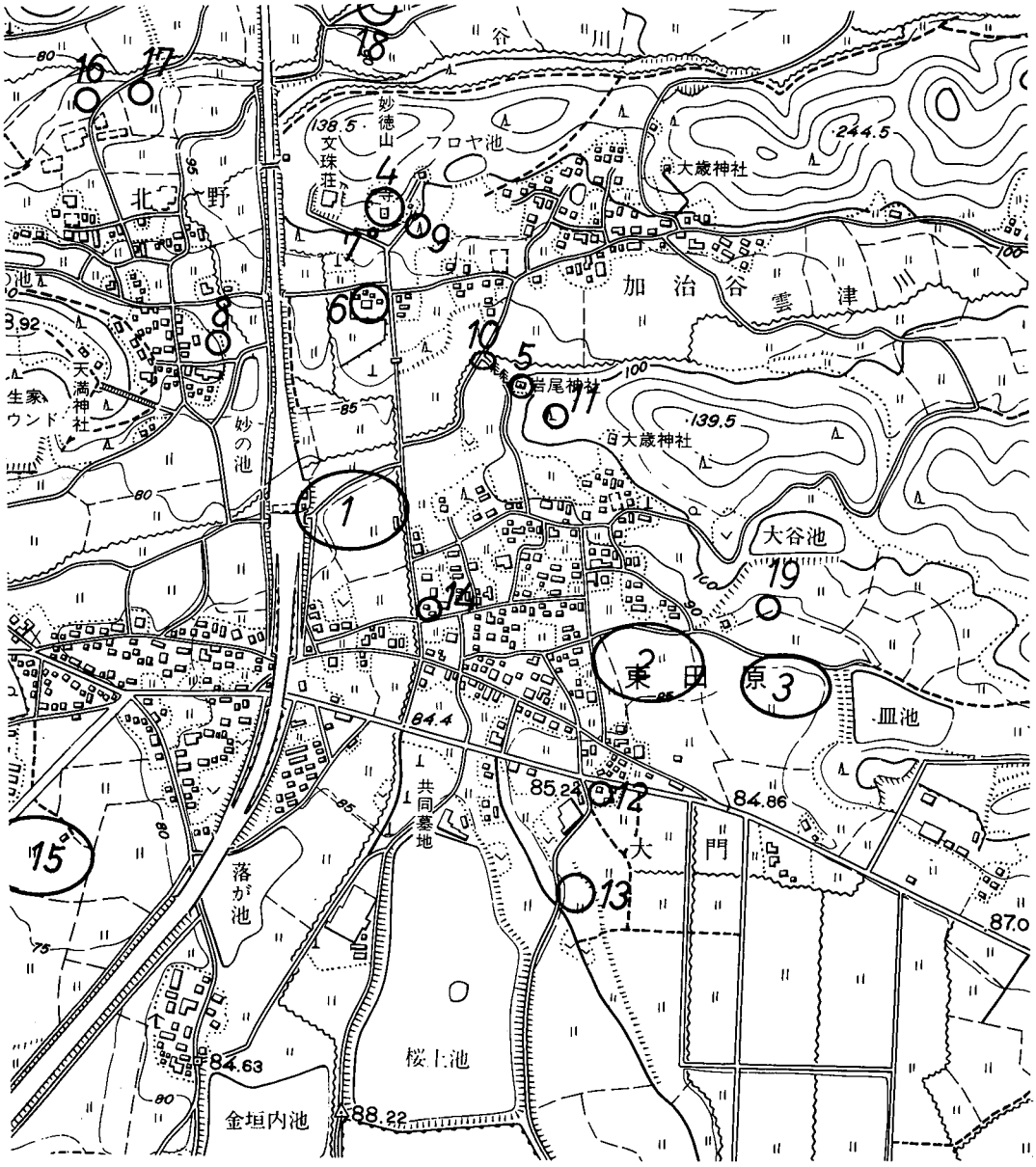


図２　大門集落周辺遺跡分布図（10,000分の1）

1．大門岡ノ下遺跡
2．大門遺跡（池田地区）
3．大門遺跡（皿池の下地区）
4．神積寺
5．岩尾神社
6．悟真院（神積寺）
7．阿弥陀種子板碑
8．石造五重塔
9．妙徳山古墳
10．石橋と石造鳥居
11．ビワクビ古墳
12．池ノ下古墳
13．旧石器時代遺物採集地
14．石棺仏（家形石棺）
15．西田原前田遺跡
16．東広畑古墳
17．東新田古墳（ツブレ塚）
18．大畑群集墳
19．石室残骸？

Ⅱ．大門遺跡（池田地区）の調査

１．調査に至る経過

県営圃場整備事業（田原東部地区）の計画が進行し、この地区も圃場整備されることとなった。これまでに、福崎町内では、分布調査等により遺跡の位置等の把握がなされているわけではなかった。そこで、平成２年度に、大門工区内の分布調査を行った。(11) その結果、遺物の散布が確認でき。遺跡の存在が濃厚となった。この結果を受けて、平成３年度に福崎町教育委員会が、確認調査を実施して、遺構の存在を確認するに至った。その後、姫路土地改良事務所等と協議の結果、遺構面が傷付けられる恐れのある部分に関して調査を行うこととなり、全面発掘調査を行うに至る。

２．調査概要

池田地区と皿池の下地区との調査を行った。調査区にそれぞれ№１～９まで番号を付し地区番号とした。（図３）

１～６までは、自然河川（谷川）の跡と遺物包含層を確認した。７の横には、古墳の石室の残骸と思われる巨石の一部が存在し、ここの墳丘を確認すべく調査を行ったが、墳丘の跡を確認するまでには至らなかった。８からは、pit が検出されたにとどまる。９からは、pit や溝、墓が検出された。（図４）

図３　大門遺跡調査区位置図

３．遺構

調査区№９の北半分は、耕作土をどければその下から、明黄色粘土を呈する地山に掘り込まれた遺構が検出された。南半分は、遺構面上に整地をかけて、地ならしをしている状況が確認できた。一番深い最南端部分で約1.0mの盛り土があった。

調査区№９の北西隅から地山面に掘り込まれた長方形の穴を一基（SX－２）検出した。（図５）

ほぼ南北方向に主軸を置き、南北は2.3m東西は0.9mとなっている。この中の土層堆積は、上下２層に分かれ、上層は、淡茶灰褐色土（炭と地山土を含む）下層は、淡灰褐色土（炭を含む）にわかれる。この穴からは、人頭大の石が７点と土師皿３点、古銭７枚が出土した。古銭と土師皿２点は、北端寄りから出土し、残り１点の土師皿は、中央東寄りの石の下より出土した。

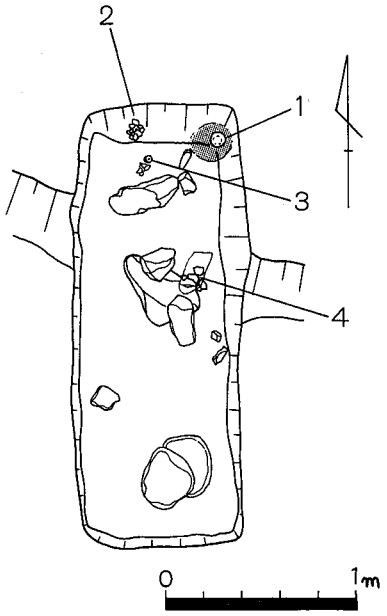


図５　SX－２遺物出土状況

古銭が出土すること、穴の形状からも墓と考えられる。この長方形の形状から木棺か何かを入れているのかと考えられ、精査して見たが、それらしい跡は検出し得なかった。ここの、上層の土は、地山土を含むことからも、一度掘り返した土を利用して再度埋めていると考えられる。上層と下層の境界が木棺か何かを入れている状況を呈しておらず、そのことからも、何かの物に入れずに、そのまま埋めている可能性がある。

また、石が多くこの中より出土したが、出土状況より後世の混入の可能性は薄く、大きいものでは、一番下の面から上層近くにくるものもある。これらは、埋葬当時の石の可能性が強い。

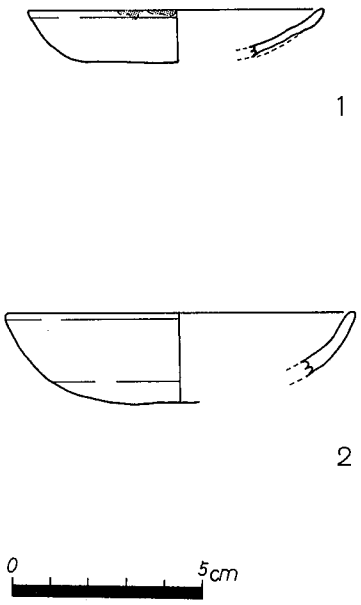


図６　SX－２出土遺物

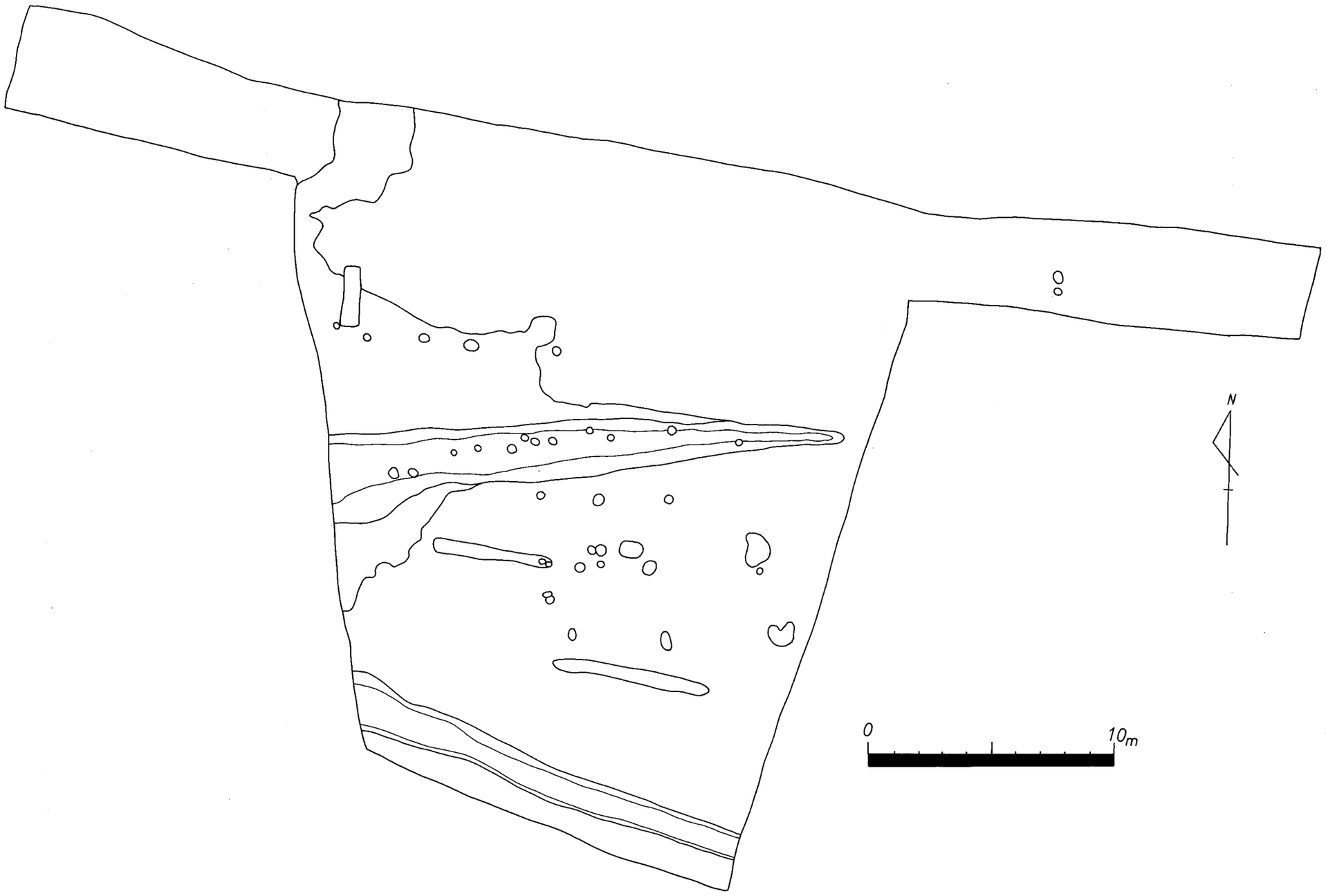


図４　調査区№９遺構配置図

４．遺物

ＳＸ－２出土遺物（図６・７）

前述のごとく、ここより石が多数と土師皿３点、古銭７枚が出土した。土師皿の内で、図化出来る物は、２点であった。

１．土師皿（図６－１．２）

(1)は、ＳＸ－２内の北東寄りにあったものである。口径7.7cm、器高1.4cmとなっている。色調は、淡赤茶色を呈し、胎土は、やや密である。焼成は、やや不良である。調整等は、依存状態がやや悪く観察はできなかった。これの口縁部分には、煤の付着が見られる。このことからも、灯明として利用していたと考えられる。この皿の周辺にも煤の広がりが確認できた。（図５）

(2)は、(1)の西側にあったものである。口径9.1cm、器高2.4cmとなっている。色調は、淡白茶色を呈し、胎土は、密である。焼成は、やや良であるが表面の剝離等が見られる。これも、依存状態が悪く、調整等の観察は、不可であった。

他の１点は、破片であり、口径・器高は分からない。色調は、淡赤褐色を呈し、胎土は密、焼成は、やや良であった。

２．古銭（図７）

(3)は、ＳＸ－２内の北半中央部分より出土した。これは、７枚ひとまとまりとなって出土した。これらの種類は、全てが重なり引っ付いているために全種類は分からない。しかし、一番上と思われるものは、「開元通宝」と読める。後のものは、色調・質から考えると、２枚目までは、色調・質とも同様であり、「開元通宝」の可能性がある。後の５枚は、色調・質ともに異質のため、別種類の可能性が高い。

これらは、偶然に重なったものではなく、ひとまとめにした結果重なったようである。古銭は、全て中央に方形の穴があり、その穴に、植物繊維の紐状のものを通して束ねている。さらに、その上から紙質のもので覆っている状況である。

この古銭は、北寄り中央の土師皿の南側から、「開元通宝」と読める部分を下にむけて出土した。出土状況からも土師皿の上に古銭をのせていたと考えられる。

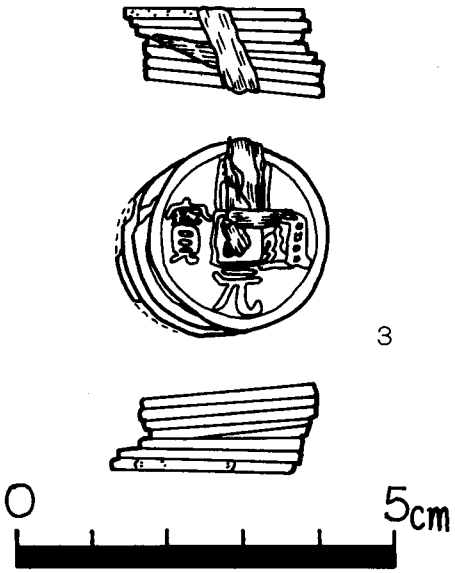


図７　古銭

Ⅲ．大門岡ノ下遺跡の調査

１．調査に至る経過

大門遺跡同様、平成２年度に分布調査を実施し(12)、平成３年度に福崎町教育委員会によって確認調査を実施した。

分布調査の際に、採集遺物の中に弥生土器らしいものが含まれており、弥生時代の遺跡の存在の可能性を示唆する報告を受けていた。(13)

それをもとに、確認調査を実施したのであるが、その時点では弥生時代の遺構は確認できなかった。ここでは、中世頃の遺構・遺物の確認はできた。

その結果、遺構は圃場整備区域内のほぼ全域にあることが分かり、遺構面の傷付けられる場所の調査を行うこととなった。（図８）

２．調査概要

調査区は、田２筆分と排水路部分である。

ここの、北方には神積寺があり、過去ここは、神積寺の境内地であったようである。そのために、この寺と何等かの関連がある物が出土する可能性がある。しかし、直接、寺関係のものと判断できるものの出土はなかったが、ここからは、中世頃の遺構・遺物が確認された。これらが、寺と関係するかどうかは、今後の課題である。

他には、調査区南端中央部分から弥生時代中期前半頃の土壙が確認された。さらにその東方、調査区東端やや南寄りの部分から縄文時代晩期前半頃のものと思われる、竪穴住居址１棟が確認された。（図９）

図８　大門岡ノ下遺跡調査区位置図

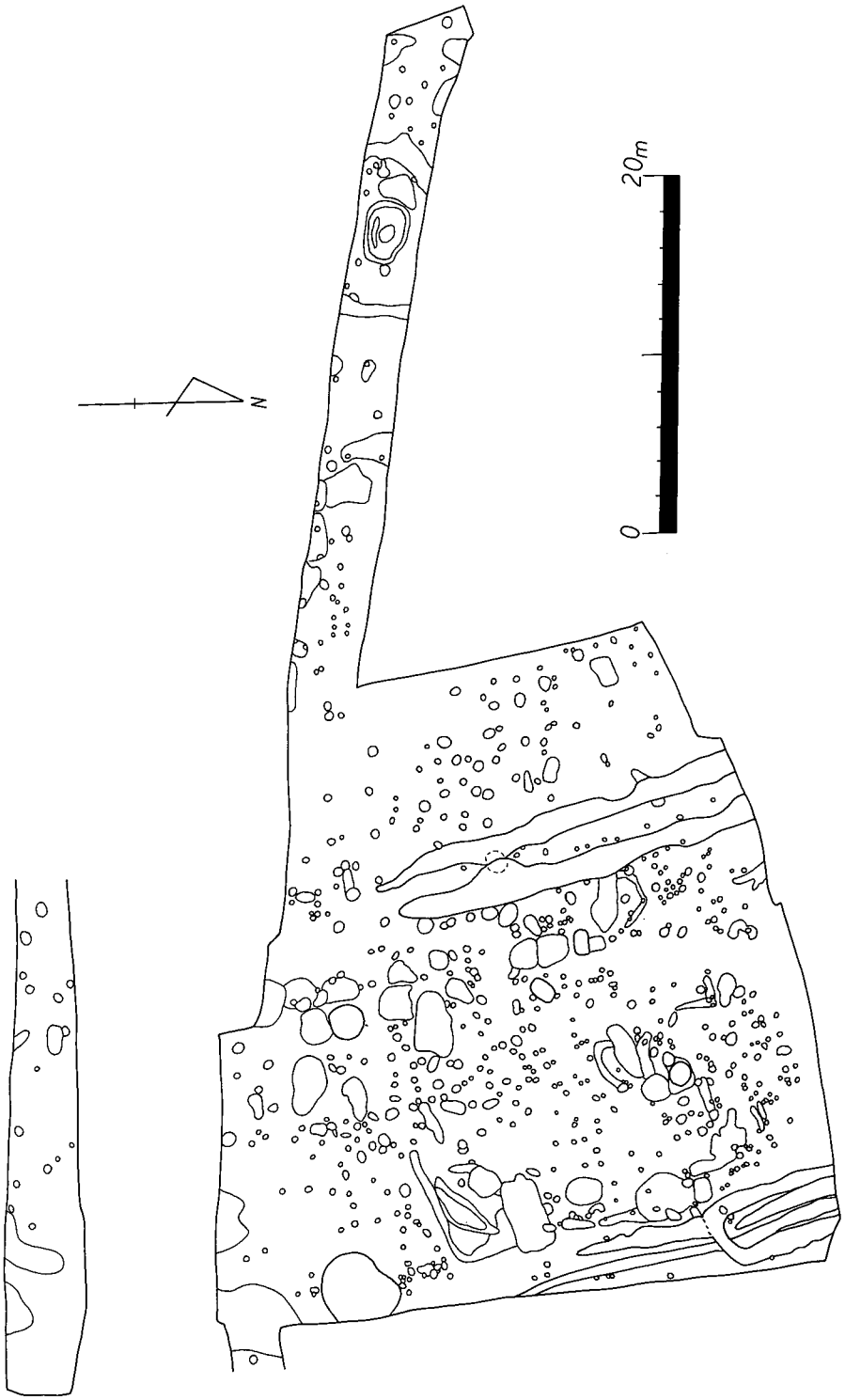


図９　調査区遺構配置図

３．遺構

調査区内は、耕作土を除けばその直下より明黄色粘土を基盤とする地山層があり、ここに各種遺構が存在する。

ここの遺構面は、中央南寄り部分から黒茶色粘質土にかわる。この広がりは、東西方向に広がっていることが分かった。ここの地山面は、調査区内北方端が一番高く、南方端で一番低い形となる。調査区外の南方では、段丘部分の高位部になり調査区内南端が最下部となることがわかる。よって、この土の広がりは、旧地形の落ち込みを示し、その場所に別の土が入り地山面を形成していると思われる。

この調査区の東端中央南寄りの場所から不定円形の掘込みを検出した。(図10)

東側を一部残した形となったため東西径は不確かだが、直経約4.3mとなる。この遺構内埋土は、黒色シルト質土を呈する。この落ち込みは、中央部分が一番深く、一番残りのいい部分で約25cmの落ち込みがあった。

この落ち込みは住居址と考えられ、これに伴う穴を探したが柱穴と考えられるものが２個しか確認できなかった。これらの穴は南北方向に並ぶ形をとる。しかし、北部分の穴が浅く北より過ぎることからも柱穴の可能性は薄いかも知れない。

ここの中央やや北寄りに石の集まりがあり、この中には焼土があった。そのことからも炉跡と考えられる。

ここの住居址内からは、縄文土器と考えられるものが住居址内周辺部分から出土している。

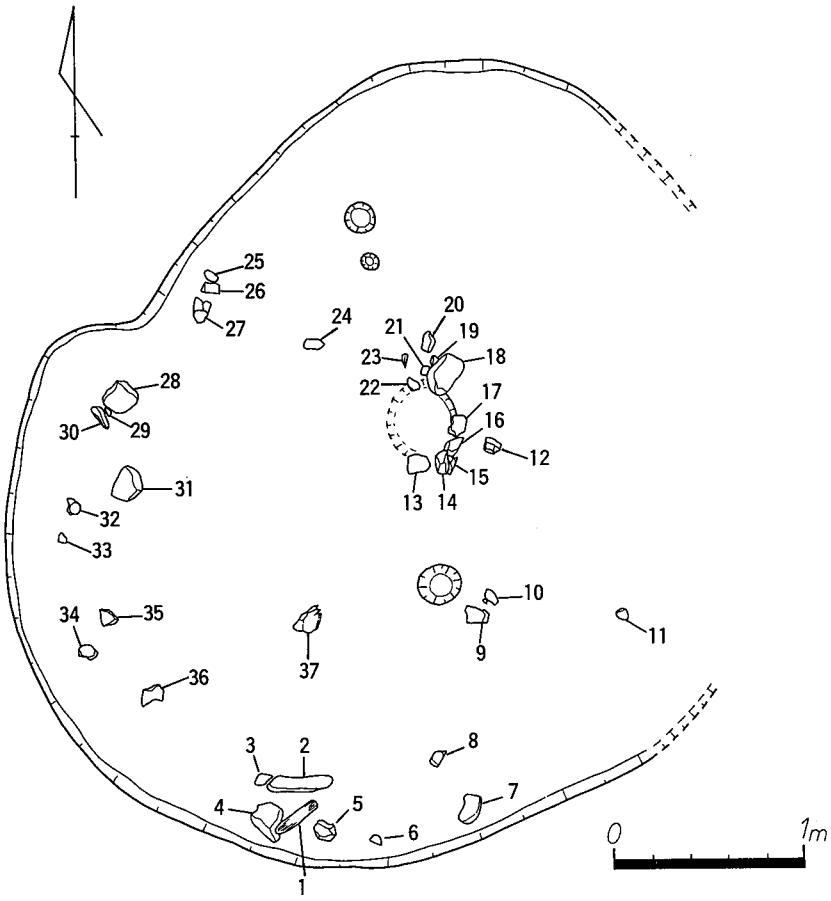


図10　住居址遺構図（SB－25）

4．遺物（図10．12）

床面遺物と考えられるものや、まとまりのある遺物に関しては、番号を付して取り上げ、他はSB－25内の土を全て持ち帰り、水洗いを行い、中に含まれている遺物の全てを取り出した。その結果、SB－25からは、縄文土器が大小破片を合せて約400点出土した。この他に石製品も出土し、さらに、少量ではあるがサヌカイト片の出土もあった。

１．縄文土器（図12－8．24．32．37～40）

これらの土器片であるが、出土したほとんどのものは、細片であり図化可能なものは、少量であった。これらを、口縁部分、底部、その他（体部）に分けた場合、口縁部分は15点、底部は5点、その他376点出土した。これらは、全て別固体というわけではなく、胎土、色調、焼成の類似から同一固体と考えられるものもあり固体数としては少なくなる。

しかし、底部片に関しては同一固体のものがなく別固体と考えられ、少なくとも５固体分の土器がこの中にあったと考えられる。

ここから出土した土器の特徴は、色調は、暗褐色系統のものがほとんどで、胎土は、粗く中に１mm大の砂粒を多く含んでいる。焼成も、やや不良なものが大半である。さらに、土器の表面は、粗い条痕が認められ、内側はナデをほどこしている。

条痕の施しは、口縁部と思われるところまで付しているのが２点、口縁部に条痕が認められないのが13点、底部付近まで条痕を付しているのが２点、付していないのが３点、その他（体部）に関しては、ほぼ全て条痕を付している。

口縁部の破片と考えられる。（図12－８．24．38）

８の胎土は、やや粗で１mm大の砂粒を多量に含み、色調は、暗茶褐色を呈し、焼成は、やや良である。調整は、内外面ともナデをほどこし、口縁端部は、やや強いナデを用いて丸みをもたせるようにしている。

24の胎土は、粗で１mm大の砂粒を含み、色調は、表面が暗黒褐色、裏面が暗赤茶色を呈し、焼成は、やや不良となっている。調整は、内外面ともにナデていると思われ、特に、口縁端部はやや強いナデをほどこし丸みをもたせるようにしている。

38の胎土は、やや粗で１mm大の砂粒を含み、色調は、表面が暗茶白色、裏面が暗褐色を呈し、焼成は、やや不良である。調整は、外面は条痕をほどこしたままで、内面はナデている。口縁端部は面をもたせるような形でナデをほどこしている。

底部片である。（図12－33）

33は底径は4.4cm、残存高は、4.2cmをはかり、胎土は、やや粗で１～２mm大の砂粒を多量に含み、色調は、暗赤茶色を呈し、焼成は、不良である。調整は、内面はナデているようであるが、外面は磨耗が激しく不明である。

体部片と考えられる。（図12－37．39．40）

37の胎土は、やや粗で１mm大の砂粒を含み、色調は、表面が暗黒褐色で、裏面が暗茶褐色を呈し、焼成はやや不良である。調整は、外面は条痕を残し、内面はナデている。

39の胎土は、やや粗で１㎜大の砂粒を含み、色調は、暗茶褐色を呈し、焼成は、やや不良である。調整は、外面は条痕を残し、内面はナデている。これは、粘土板を重ねた部分で剝離し土器成形がよくわかる物となっている。

40の胎土は、やや密で0.5～１㎜大の砂粒を含み、色調は、暗茶白色を呈し、焼成は、やや良である。調整は、外面は条痕を残し、内面はナデている。

２．石製品

ＳＢ－25からは、石棒１点、石皿１点、磨り石１点、敲台１点が出土している。

石棒は、長さ26.7㎝、幅5.4～6.2㎝、厚さ4.1㎝となっている。石材質は、結晶片岩の一種で絹雲母片岩である。これは、先端が大きくふくらむ物ではなく、中程が微妙にふくらむ形となり、先端はそのままの形ですぼまる物となっている。

敲台は、長さ33.7㎝、幅8.2㎝、厚さ4.2㎝となっている。石材質は、流紋岩である。Ａ面は、敲打痕が１か所、Ｂ面は、敲打痕が２か所見られる。これのついている位置は、Ａ、Ｂ面の対象位置についている。さらに、この中央部には、溝状のくぼみがあり、何かを成形した際についた溝の可能性がある。

石皿は、長径16.7㎝、短径15.2㎝、厚さ6.8㎝となっている。石材質は、流紋岩である。表面は滑らかな面を呈し、Ａ面とＢ面との中間にかけて火を受けたような部位がある。

磨り石は、長さ9.9㎝、幅6.2㎝、厚さ4.2㎝の拳大の石を使用しているが、本来は、もっと大きな石であったのを小さくして使用しているようである。特に裏面はもちやすい形にしているような感がある。表面は、非常によく使用しているのか、かなり滑らかな面をしている。石材質は、流紋岩である。

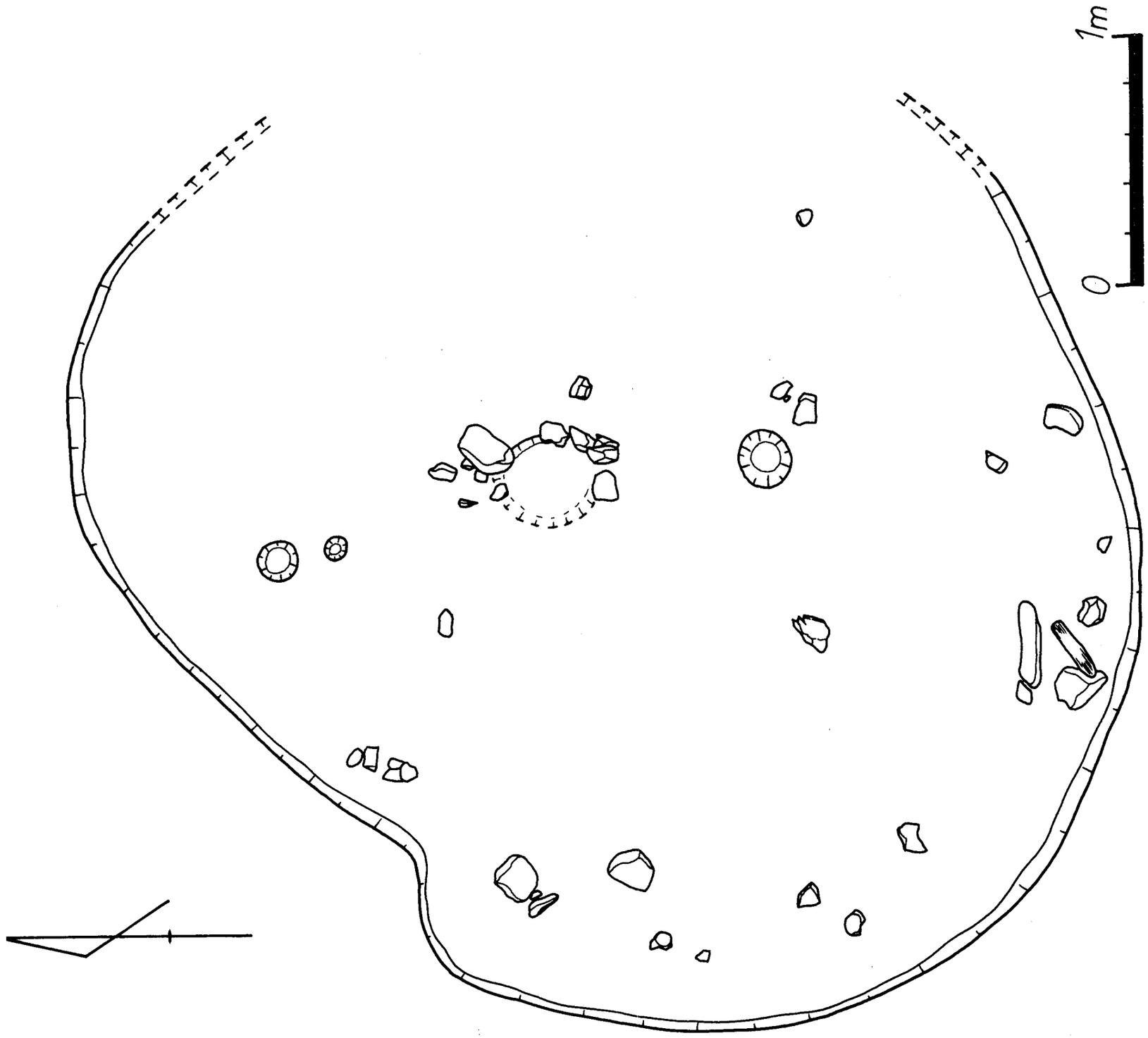


図11　住居址遺構図（SB－25）

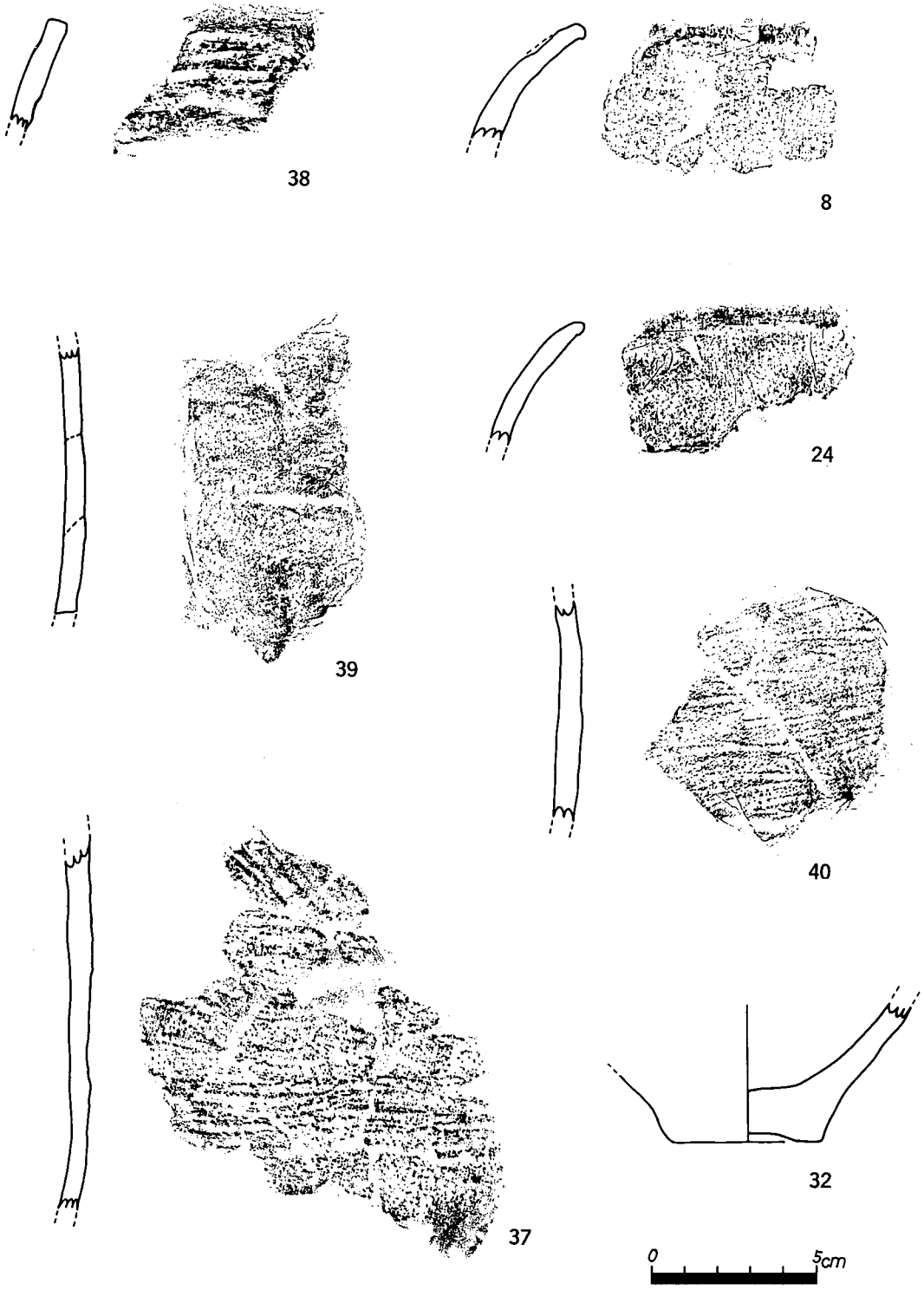


図12　SB－25出土土器

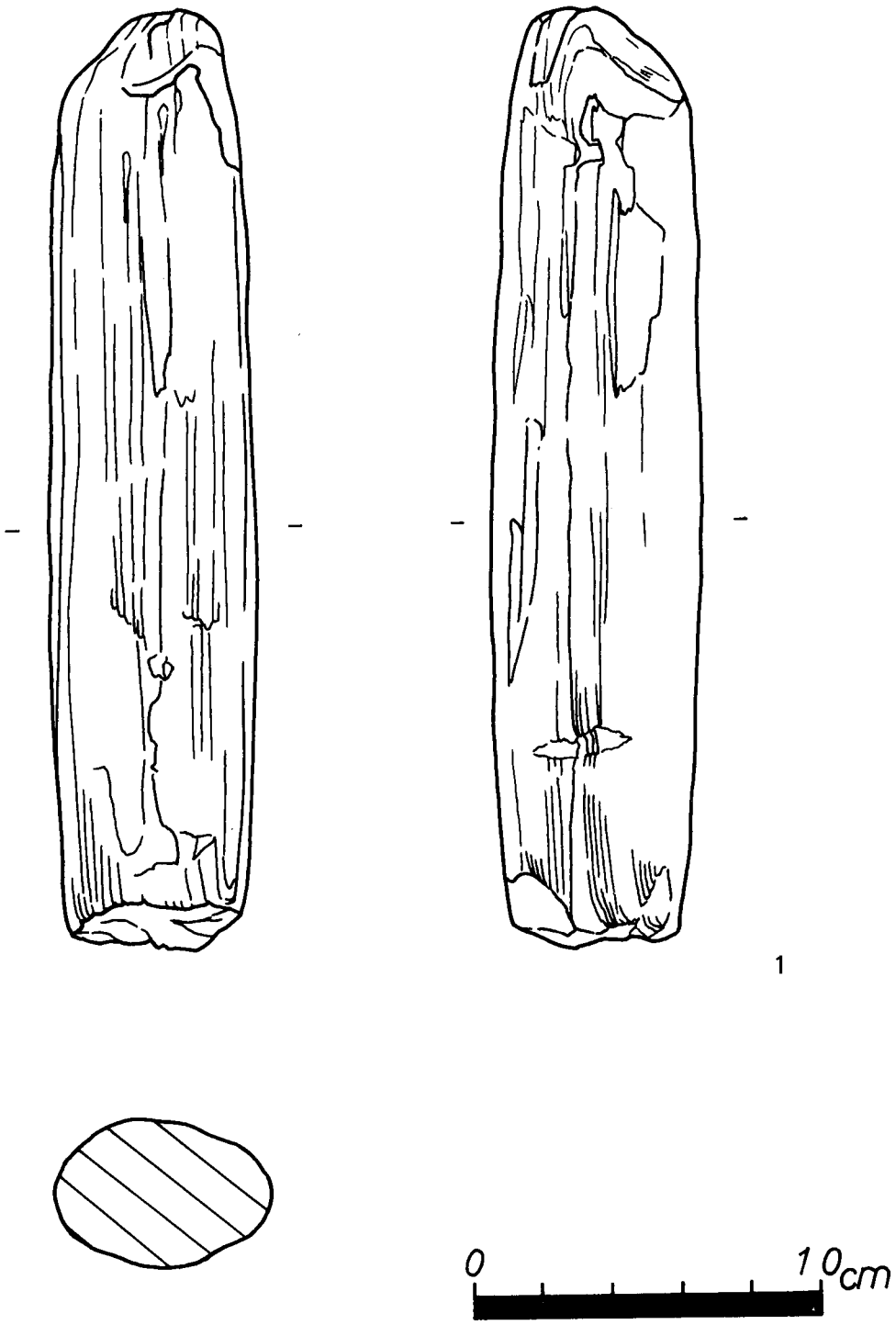


図13　石　棒

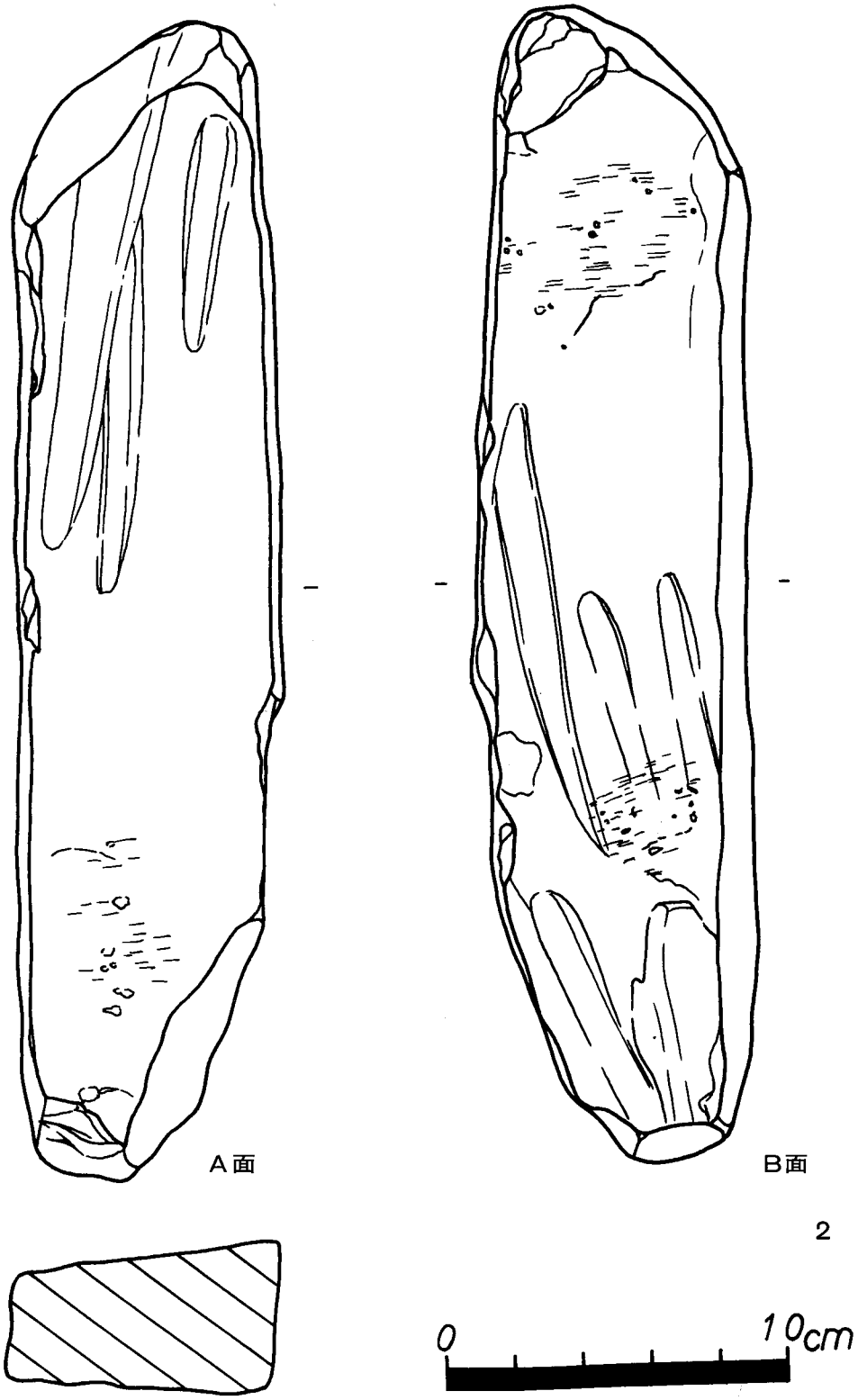


図14　敲　台

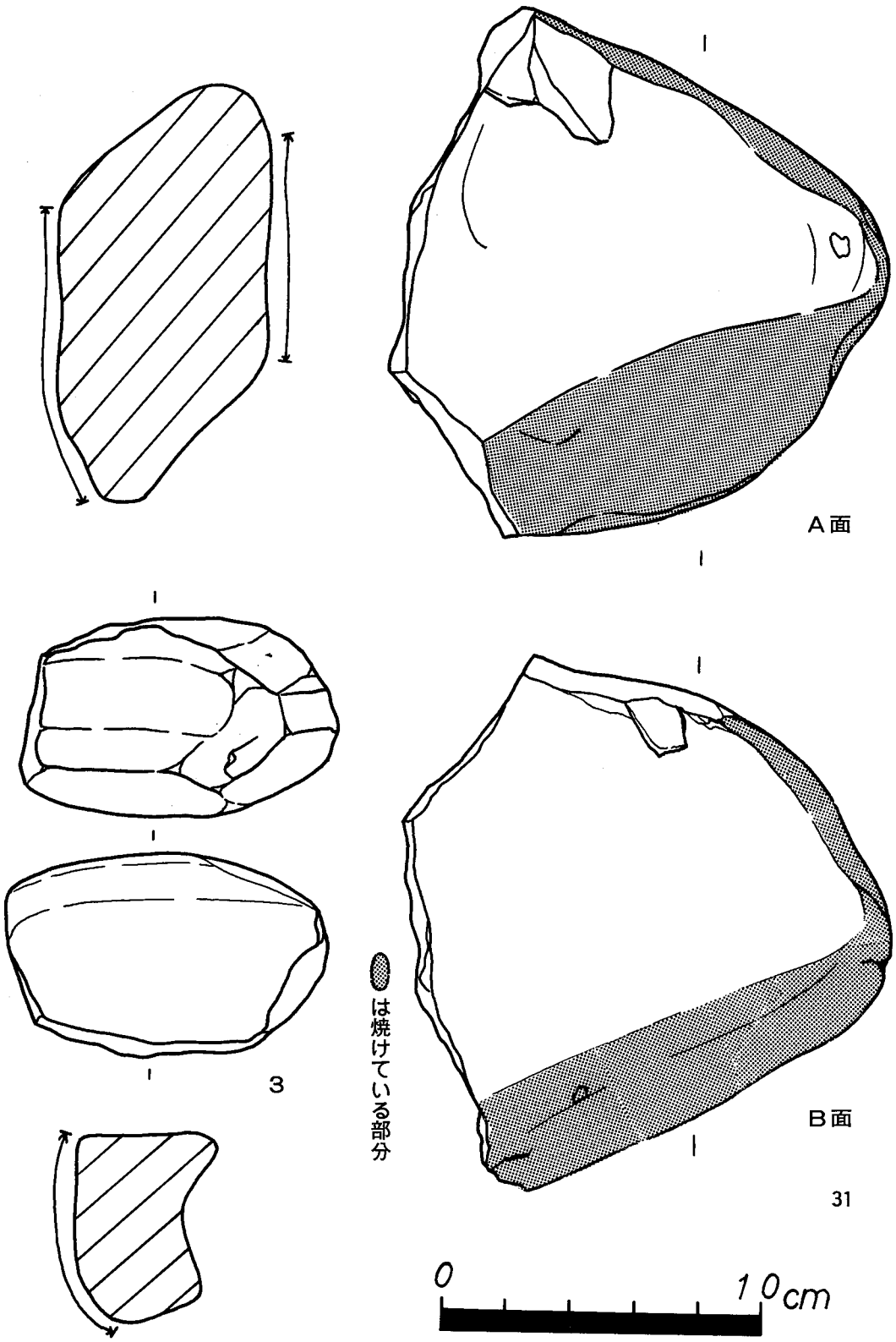


図15　石皿・磨り石

Ⅳ．大門岡ノ下遺跡土層サンプル分析結果

１．経緯

大門岡ノ下遺跡内のＡ･Ｂ２地点よりサンプルを各３点（計６点）採集し、福崎町教育委員会が神戸大学教授田中眞吾先生に依頼し、大阪教育大学非常勤講師井上茂先生に分析していただいた。

２．試料（サンプル）の処理

各試料をビーカーに取り、水を注いでよくかきまぜ、かたまりはよくもみつぶして、しばらく放置する。砂粒が落ち着いたところで、水をしずかに捨てる。これを数回くりかえして、粘土分やシルト分を除く。つぎに超音波洗浄器にかけて、各粒子のよごれを除いた後、乾燥させたものを双眼実体顕微鏡で観察した。

３．結果

３－１　Ａ地点　試料１～３について

試料　1

バブルウォール（B. W. と略記）型の火山ガラスを多量に含む。この火山ガラスは無色のものを主体とするが、着色されたものが相当量見出される。この色の特徴はアカホヤ（Ahと略記）火山灰に特有のものである。火山ガラスのほか、角セン石、シソ輝石、磁鉄鉱等の重鉱物も多量に認められる。また、火山ガラス、重鉱物等の火山灰起源のもののほか、石英を主とした岩石成分もかなりの量が認められる。

試料　2

火山ガラス、重鉱物、そして石英等の岩石成分も試料１と同様である。

試料　3

火山ガラス中、着色されたものがやや多く認められるが、その他、重鉱物や岩石成分は試料１と同様である。

３－２　Ａ地点試料のまとめ

Ａ地点試料は全体として、粘土、シルト等の細粒物質が多く含まれ、また、有機物も多量に含まれていて、前述の処理に多くの時間を要した。

火山ガラスや重鉱物の組合わせや量については、各試料について、有意の差は認められない。また、これらはAh火山灰を主体に、その他のもの（AT、その他大山系のもの）が混入していると思われる。産状等から見て、二次的に、水流等によって運搬され再堆積したものと考えられる。

３－３　Ｂ地点試料について

試料　1

火山ガラス（B.W. 型）を多く含み、Ah特有の有色ガラスもかなり認められる。角セン石

等の重鉱物は少ない。石英等の岩石成分は多量に見られる。有機物も少なく、全体として、Ａ地点のものに比して白っぽい感じである。

試料　2

重鉱物が試料１よりやや多いが、その点については、あまり相違はない。

試料　3

火山灰起源物質（火山ガラス、重鉱物等）は、試料１．２より少なく、石英等の岩石成分は多く含まれ、色調も試料１．２より白っぽい。

３－４　Ｂ地点試料のまとめ

Ｂ地点試料は、Ａ地点のものに比して、有機物の含有量が少ない。

火山ガラスの重鉱物の組成はＡ地点のものと大差はなく、同様のでき方が考えられる。

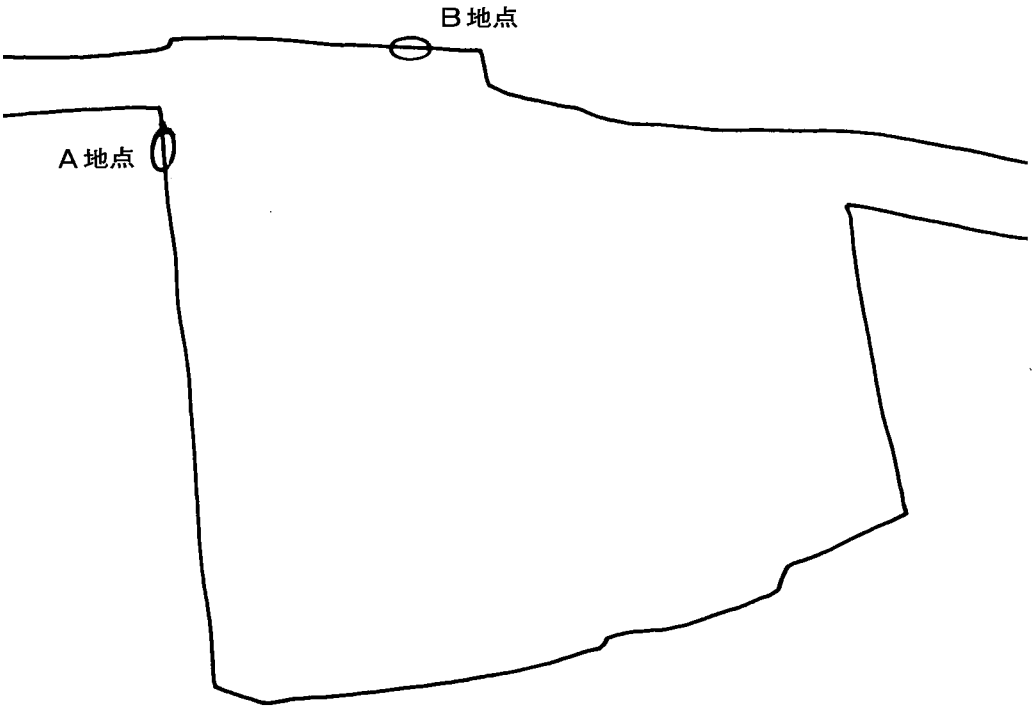


図16　土層サンプル採集地点

V. ま と め

大門遺跡（池田地区）（皿池の下地区）は、集落の中心を掘り当てたのではないようである。

皿池の下地区では、自然河川とそれに伴う遺物包含層を確認したに過ぎず、池田地区では、建物跡らしき物はあっても、まとまりを見せていない状況である。さらに墓も確認した。ここから、検出した墓の人物は、単純に埋葬されたのではなく、遺物から見ても丁寧に埋葬されているようである。当時の墓制を考える上での一資料になると考える。

ここでは、墓を１基しか確認していない。これは、調査区の制限のためなのかもしれないが、集落云々を考えるには、今後の調査によって墓・住居の在り方を考えて行かねばならないと思われる。

大門岡ノ下遺跡は、縄文時代晩期から中世にかけての複合遺跡であり中心となる時期は中世となっている。ここは、北方の神積寺の境内地であり、それゆえにこの時期が重要となってくる。そもそも、大門という地名の起こりもこの寺との関連からきているようであるし、この寺と結び付いてできた集落の在り方を考えていくにもいろいろな課題を提供してくれる。

この中から、墓が２～３基検出されている。先の大門遺跡池田地区でも確認しているが、ここは、神積寺の境内地であったようであり、その様な中に墓を造ってくること自体問題となってこよう。神積寺の寺域の問題もここから考えられると思われる。しかし、検出された遺構・遺物の中から直接神積寺と関連のあるものは確認しておらず、今後の整理作業の進展を待ってとらえていきたい。

この遺跡から、福崎町内で初めて竪穴住居を確認した。しかも、縄文時代晩期のものであり、その中に、石棒といった呪術道具までも有するものである。このことは、この住居址の特殊性を示すのみならず、縄文祭祀を考える上での一資料となってくると考える。

この概要報告書は、調査を行った中でも、ほんの一部分の成果しか報告していないが、他のものに関しては、今後の調査報告書に譲ることとしたい。

最後になりましたが、以下の機関・多くの方々には、調査・整理を通してお世話になりました。銘記して謝意を表す次第です。

１．指導・助言をいただいた機関（順不同）
兵庫県教育委員会、丘庫県埋蔵文化財調査事務所、姫路土地改良事務所、田原東部土地改良区、大門区、神崎郡歴史民俗資料館、福崎町史編集室、福崎町史編集専門委員会
２．ご教示いただいた方々（順不同・敬称略）
櫃本誠一、山口卓也、小川良太、山下史朗、松本正信、増田重信、田中眞吾、荻能幸、岸本道昭、藤原昭三、原田和幸、高井佳哉、井上茂
３．発掘調査・整理作業に協力いただいた方々（順不同・敬称略）
山田正英、長沢保、笹倉重夫、高井弘、三輪正弘、沢田義信、柳田春夫、池上數三、吉識静男、尾上源作、川島一、田中博、埴岡稔和、吉識薫、栗岡則男、藤本浩司、出田豊、沢村公道、沢村友道、長沢茂太、西沢かずめ、福永聡、長谷川知美、宮脇洲子芝万寿人

註

(1) 田中眞吾「福崎とその周辺の自然に関する資料」、『福崎町史』第３巻資料編Ⅰ
平成２年　福崎町

(2) 平成２年度、松本正信、加藤史郎両氏が分布調査を行った。

(3) 松本正信「福崎の原始・古代・中世資料」、『福崎町史』第３巻資料編Ⅰ
平成２年　福崎町
『兵庫県埋蔵文化財調査報告書第７冊』

(4) 松本正信(3)に同じ。

(5) 松本正信(3)に同じ。

(6) 松本正信(3)に同じ。
鎌谷木三次『播磨古文化財の実証的研究』 昭和56年

(7)『福崎町の文化財』第１集　昭和50年　福崎町教育委員会

(8) 明山大華・藤澤一夫「後堀河帝皇后安喜門院の御窣覩婆」、『考古学』7ノ1・2　合併号
昭和11年
(7)の『福崎町の文化財』に同じ

(9) 田岡香逸「神積寺と附近の石造遺品ー神崎郡史料採訪ー」、『史迹と美術』 第325号
昭和37年
(7)の『福崎町の文化財』に同じ

(10) (7)の『福崎町の文化財』に同じ
田岡香逸 (9)に同じ

(11) 平成２年度、松本正信、加藤史郎両氏が分布調査を行った。

(12) 平成２年度、松本正信、加藤史郎両氏が分布調査を行った。

(13) 平成２年度埋蔵文化財分布調査報告　1990年　松本正信・加藤史郎両氏報告。

遺 物 観 察 表

大門遺跡（池田地区）

挿図	図版	種類	法　量	胎　土	焼成	色　調	調　整	備　考
5-1	4-1	土師皿	器　高 1.4 口　径 7.7	密	やや不良	淡赤茶色	——	煤の付着 灯明皿
5-2	4-2	土師皿	器　高 2.4 口　径 9.1	密	やや良	淡白茶色	——	
5-4	—	土師皿	—		やや良	淡赤褐色	——	
5-3	4-3	古　銭	直　径 2.4	—	—	暗緑色	——	開元通宝

大門岡ノ下遺跡（土器）

挿図	図版	種類	法　量	胎　土	焼成	色　調	調　整	備　考
10-8 12-8	8-8	口縁部	—	やや粗 1mm大の砂粒を多く含む	やや良	暗茶褐色	内外面 ナデ 口縁端部強いナデ	
10-10	8-10	体　部	—	やや密 1mm大の砂粒を少量含む	良	表 淡白茶色 裏 淡黒色	内面 ナデ 外面 条痕	
10-15	8-15	体　部	—	やや密 1mm大の砂粒を少量含む	良	淡茶褐色	内外面 ナデ	
10-24 12-24	8-24	口縁部	—	粗 1mm大の砂粒を含む	やや不良	表 暗黒褐色 裏 暗赤茶色	内外面 ナデ 口縁端部強いナデ	
10-27	8-27	体　部	—	やや密 1mm大の砂粒を含む	やや良	表 淡白茶色 裏 淡黒色	内外面 ナデ	
10-29	8-29	体　部	—	やや密 0.5～2mm大の赤色砂粒を少量含む	やや良	表 暗茶白色 裏 淡茶褐色	内面 ナデ 外面 条痕	
10-32 12-32	8-32	底　部	底　径 4.4 残存高 4.2	やや粗 1～2mm大の砂粒を多く含む	不良	暗赤茶色	内面 ナデ 外面 —	
10-37 12-37	8-37	体　部	—	やや粗 1mm大の砂粒を含む	やや不良	表 暗黒褐色 裏 暗茶褐色	内面ナデ 外面 条痕	
12-38	8-38	口縁部	—	やや粗 1mm大の砂粒を含む	やや不良	表 暗茶白色 裏 暗褐色	内面 ナデ 外面 条痕	
12-39	8-39	体　部	—	やや粗 1mm大の砂粒を含む	やや不良	暗茶褐色	内面 ナデ 外面 条痕	粘土板のつぎめがわかる
12-40	8-40	体　部	—	やや密 0.5～1mm大の砂粒を含む	やや良	暗茶白色	内面 ナデ 外面 条痕	
—	8-41	口縁部	—	やや密 1mm大の砂粒を少量含む	良	暗赤褐色	内外面 ナデ	
—	8-42	口縁部	—	やや粗 0.5mm大の砂粒を含む	やや良	表 暗茶褐色 裏 暗赤褐色	内外面 ナデ	
—	8-43	口縁部	—	密 3mm～5mm大の小石を2つ含む	良	暗茶白色	内外面 ナデ	
—	8-44	体　部	—	やや密 1mm大の砂粒を少量含む	やや良	表 淡茶褐色 裏 暗茶白色	内面 ナデ 外面 条痕	
—	8-45	底　部	—	やや粗 1mm大の砂粒を少量含む	やや不良	表 赤褐色 裏 淡茶白色	内面 ナデ 外面 条痕	
—	8-46	底　部	—	やや密 1mm大の砂粒を含む	やや不良	淡茶褐色	内面 ナデ 外面 条痕	
—	8-47	体　部	—	やや粗 1mm大の砂粒を多量に含む	やや不良	表 暗黄褐色 裏 黒白色	内面 ナデ 外面 条痕	
10-20	—	体　部	—	やや粗 1mm大の砂粒を多量に含む	やや不良	淡茶白色	内面 ナデ 外面 条痕	

大門岡ノ下遺跡（石）

挿図	図版	種類	法　　量	色　調	石材質	備　　考
10-1 13-1	9-1	石　棒	長さ26.7　厚さ4.1 幅 5.4～6.2	淡緑灰色	絹雲母片岩	結晶片岩
10-2 14-2	9-2	敲　台	長さ33.7　厚さ4.2 幅 8.2	淡茶白色	流　紋　岩	
10-3 15-3	9-3	磨り石	長さ 9.9　厚さ4.2 幅 6.2	淡緑白色	流　紋　岩	
10-4	—	—	長さ18.0 厚さ10.0	淡 茶 色	チ ャ ー ト	
10-5	—	—	長さ16.5 厚さ 6.0	淡 茶 色	チ ャ ー ト	
10-6	—	—	長さ10.1 厚さ 3.1	淡黄白色	砂　　岩	
10-7	—	—	長さ17.0 厚さ 4.5	淡黄茶色	泥　　岩	
10-9	—	—	長さ 9.0 厚さ 2.6	暗茶白色	流　紋　岩	
10-11	—	—	—	—	—	—
10-12	—	—	長さ 厚さ 7.5～8.0	暗赤褐色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-13	—	—	長さ18.5 厚さ 5.0	暗 紫 色	チ ャ ー ト	火をうけているような感じ
10-14	—	—	長さ15.0 厚さ 5.3	暗緑青色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-16	—	—	長さ18.0 厚さ 8.0	暗茶褐色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-17	—	—	長さ20.0 厚さ 8.0	暗紫褐色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-18	—	—	長さ19.0 厚さ 5.2	暗茶褐色	泥　　岩	火をうけているような感じ
10-19	—	—	長さ 4.5 厚さ 2.0	暗紫褐色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-21	—	—	長さ11.7 厚さ 3.5	暗緑灰色	チ ャ ー ト	火をうけているような感じ
10-22	—	—	長さ 6.9 厚さ 2.2	暗紫褐色	流紋岩の岩脈？	火をうけているような感じ
10-23	—	—	長さ 7.6 厚さ 2.8	暗紫褐色	砂　　岩	火をうけているような感じ
10-25	—	—	長さ 8.5 厚さ 3.6	淡黄茶色	砂　　岩	
10-26	—	—	長さ 8.6 厚さ 3.5	淡黄灰色	泥　　岩	
10-28	—	—	長さ17.5 厚さ 5.0	淡黄白色	砂　　岩	
10-30	—	—	長さ10.7 厚さ 4.1	淡白黄色	砂　　岩	

挿図	図版	種類	法　　量	色　調	石 材 質	備　　考
10-31 15-31	9 -31	石　皿	長径16.7　厚さ6.8 短径15.2	淡茶白色	流　紋　岩	
10-33	—	—	長さ 9.5 厚さ 3.0	暗紫褐色	チ ャ ー ト	
10-34	—	—	長さ 9.2 厚さ 4.8	暗黄灰色	砂　　岩	
10-35	—	—	長さ 8.5 厚さ 3.4	淡赤褐色	砂　　岩	
10-36	—	—	長さ 厚さ 8.0～11.6	暗 紫 色	チ ャ ー ト	

※法量の単位はcm。

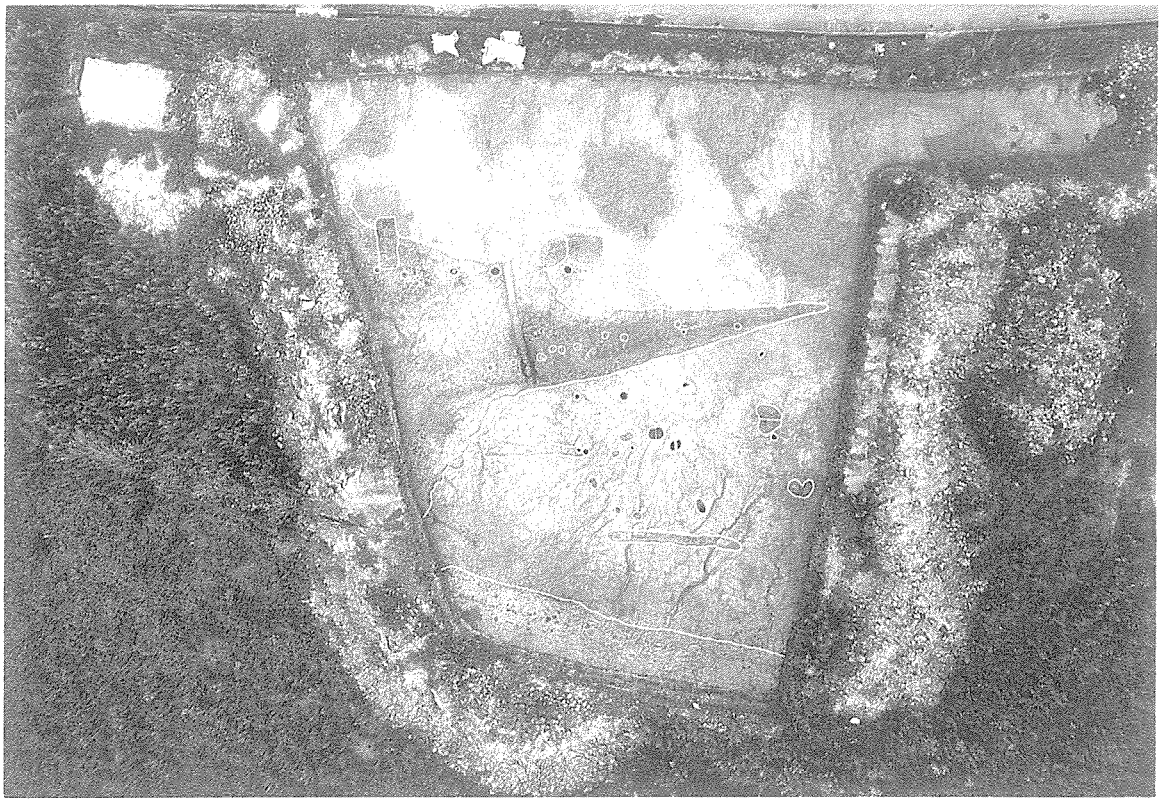
※石材の鑑定は、神戸大学教授田中眞吾先生、大阪教育大学講師井上茂先生に依頼した。

写 真 図 版

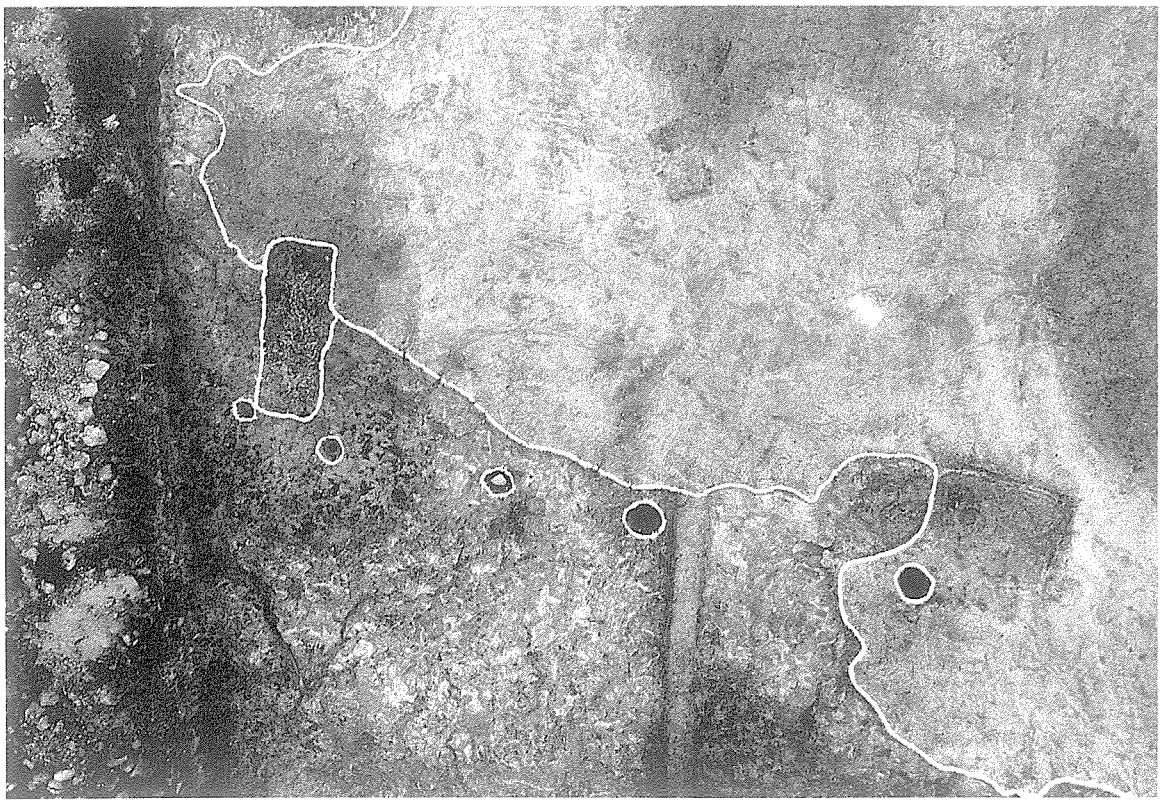
図版 1 大門遺跡（池田地区）

大門遺跡遠景

大門遺跡全景



調査区No.9 遺構状況

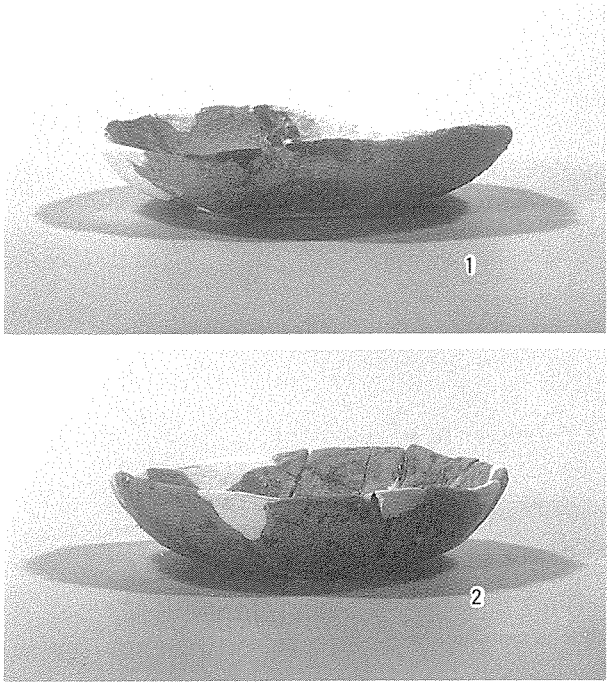


調査区No.9 SX－2

SX－2検出状況

SX－2遺物出土状況

古銭出土状況

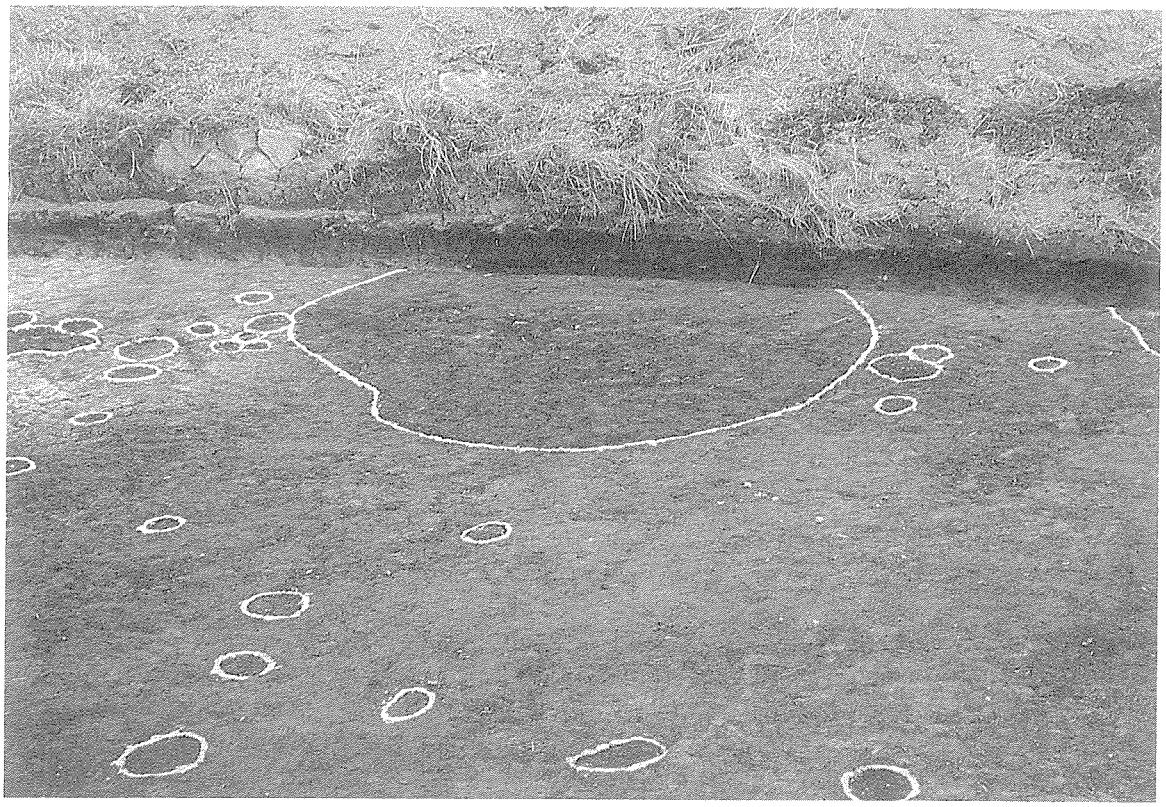


SX－2出土遺物

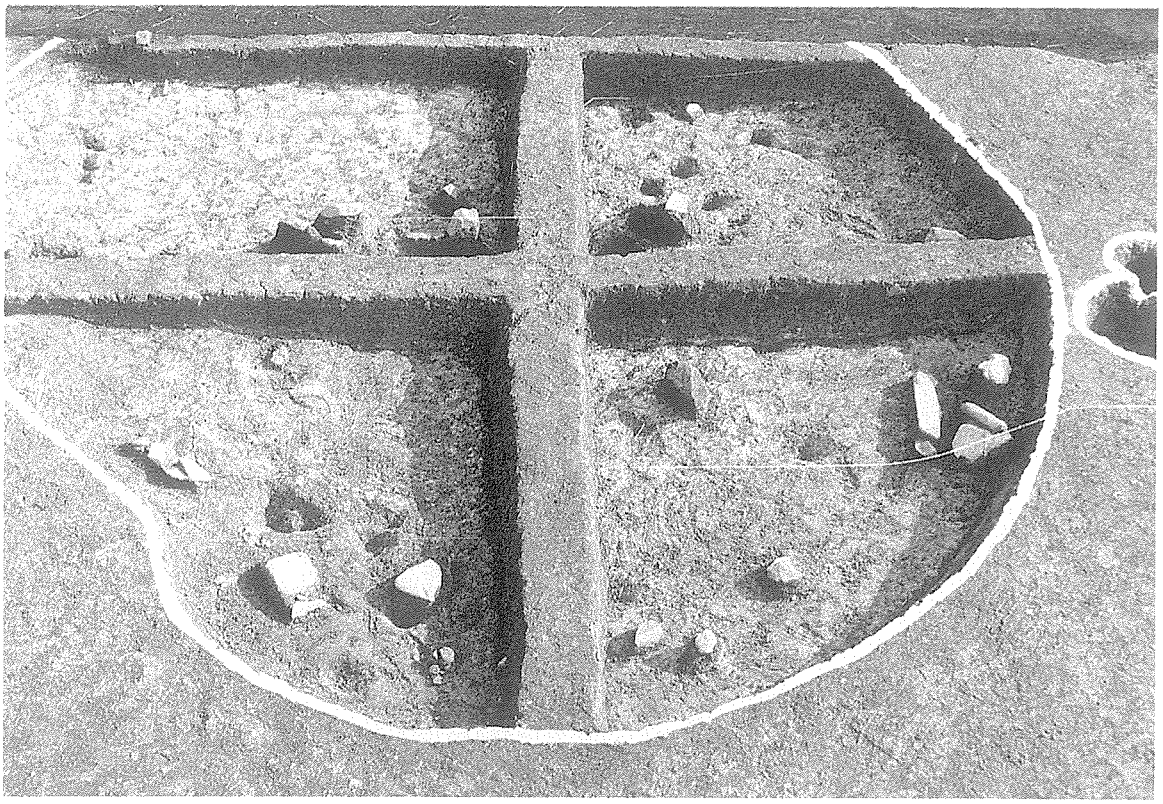
図版 5 大門岡ノ下遺跡

大門岡ノ下遺跡遠景

大門岡ノ下遺跡遺構状況

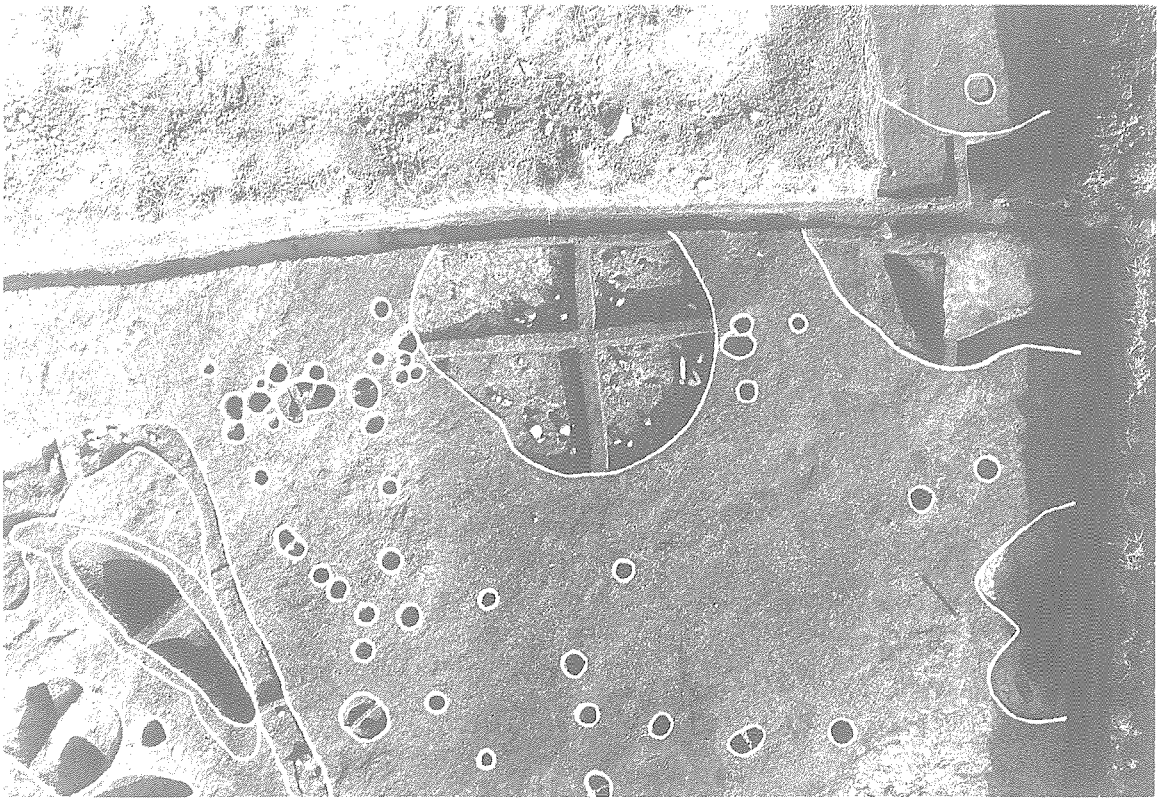


住居址検出状況

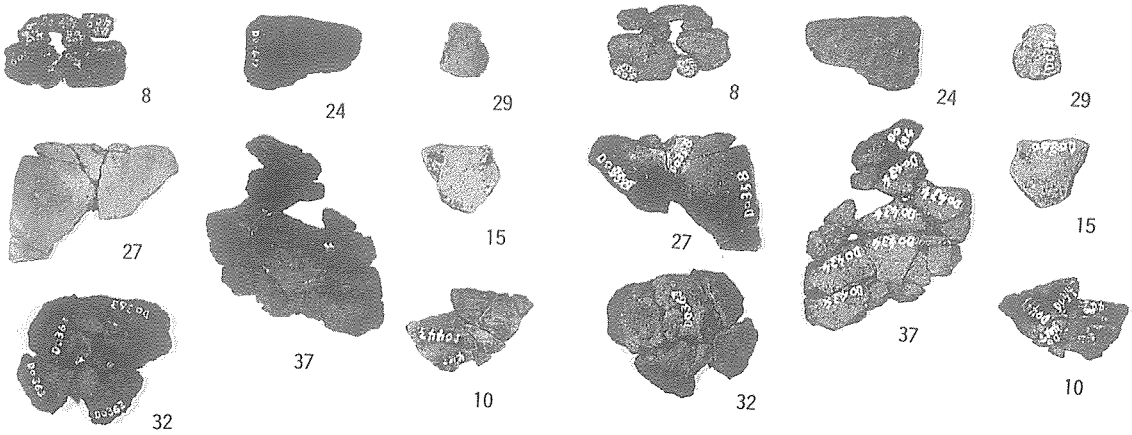


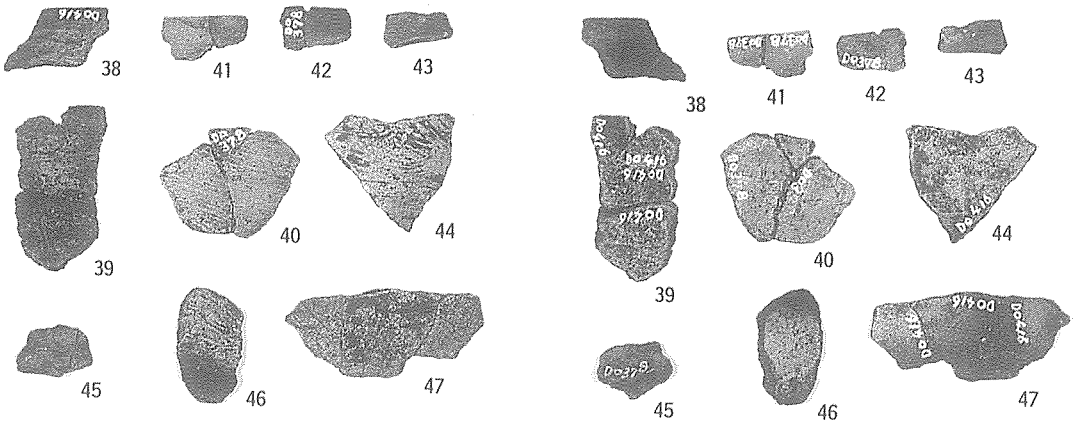
住居址内遺物出土状況

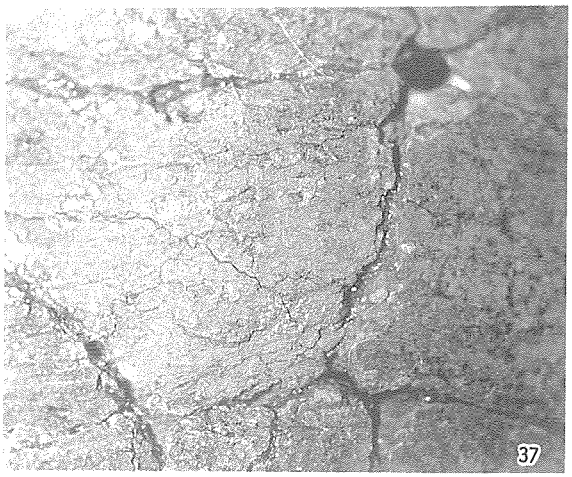
石棒出土状況

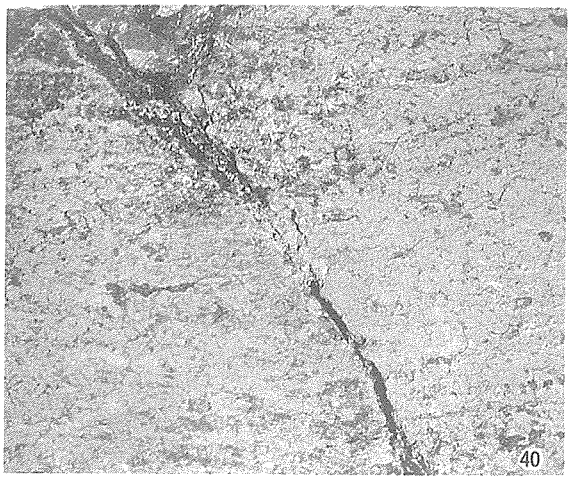


住居址状況

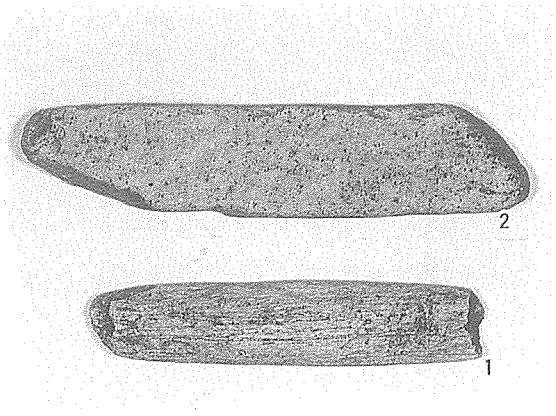


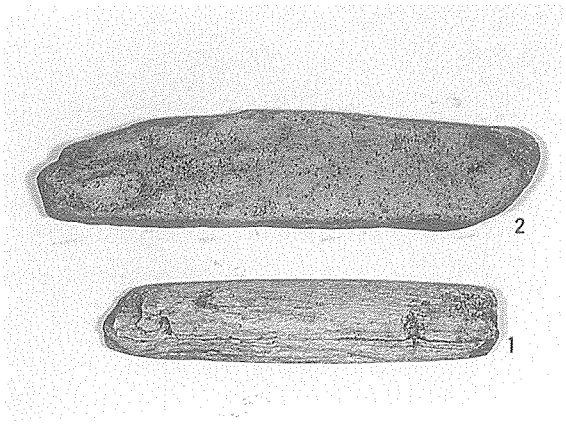


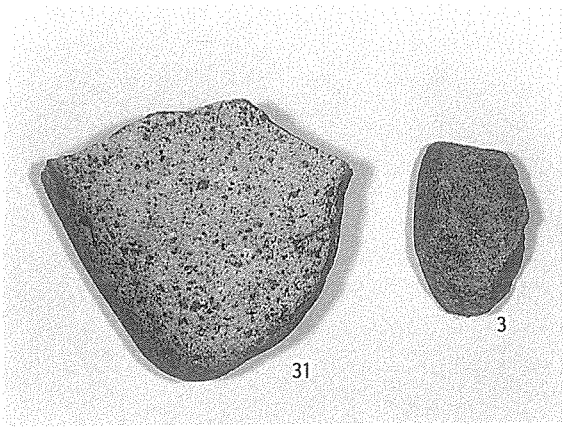


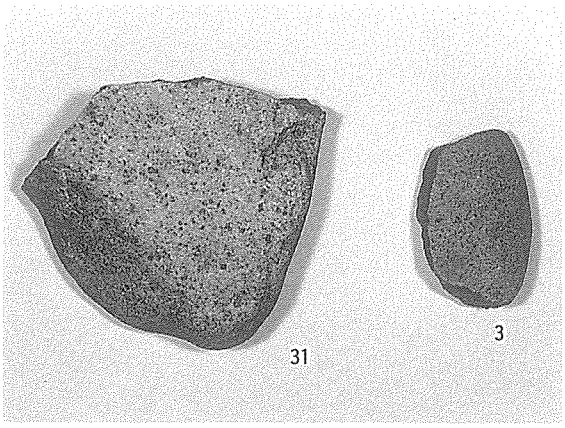


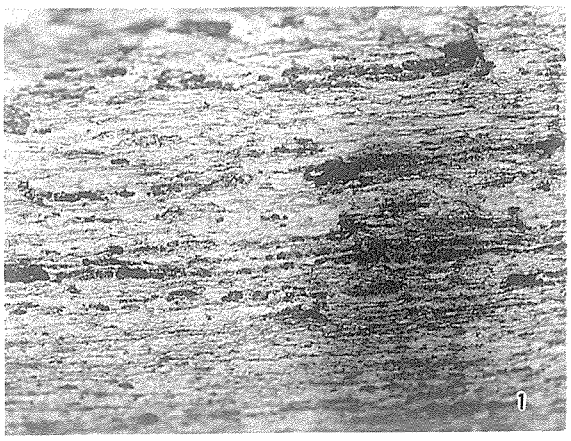
住居址内遺物（土器）











住居址内遺物（石器）

福崎町埋蔵文化財調査概要報告１

大門遺跡・大門岡ノ下遺跡

1993年3月

編集・発行　福崎町教育委員会
神崎郡福崎町南田原3116-1
TEL.0790-22-0560

印　　刷　中井綜合印刷株式会社